

はるのおべんと

「授業はいんだロフ　ととー!」

俺は思わず手で口を塞いだ。目だけでまわりを見たけど、気づかれてないみたいだ。ふう。

「起立ー!」

うっかり変身前の言葉が出るなんてな。もう慣れたはずなのに、やっぱりこの部屋が慣れないせいか

「シローくん、き・り・つ!」

「え? うわっ!」

まわりじゅう立つてるのに気づいて慌あわてて立ち上がった俺の耳に、そこらからクスクス笑う声が聞こえてきた。目の前の、先生からも。

「礼!」

俺の礼はつなだれ気味に見えるはずだと、自分でも思う。

礼が終わって、先生が教室から出てったとたん、すごい音で耳が聞こえなくなった。

黄色い声、だっけ。誰か言ったか知らねえけど、うまいこと言うもんだよ。

まあ、ここじゃ毎度のことなんだけどさ、

「慣れないよなあ、こりゃ」

「ココはよくこんなことで仕事してられるぜ。」

「あの　シローくん?」

ん?

呼ばれたのに気づいたけど、俺はそのままにしていた。

うららの声じゃねえし、呼ばれるときなんてろくなことがねえ。それは、ここ2週間で痛いくらいに覚えたからな。

「あのー、シロー、くん?」

だから、このときも向き直ろうともしなかったんだ。

「聞こえてるよ。なんだよもう」

「聞こえてるなら、こっち向うっ! いて♡」

3 はるのおべんと

え？

ぐるつと振り向こうとした俺の頭が、思いつきりつかまれた。

「そっち向いちゃダメえっつ!!」

うららの声だ。ああ、そっか、そうだった。

「次は体育だっけ。着替え、な。わーっただよ。出てきやいいんだろ」

痛い首をおさえながら、後ろを見ないようにして、俺はクラスの入り口から外に出た。

「女子校に男ひとりってのは、妙なもんだよ。まったく」

「もう、更衣室じゃないのに着替えたりして！シロツ シローくんからかうの、やめてよ!!」

思いつきり言ったわたしの声に、みんなが耳を押さえた。

1日に何回怒鳴^{どな}ってるんだろう、わたし。以前はこんなことなかったのに、シロツプがこのクラスに留学してきてから、性格変わっちゃったわ。

留学するって聞いたときは、一緒のクラスになれたらいいなあって思ってたのに

「そんなに怒らないですよ。それより、うらら!!」「なに!？」

わたし、すごい目になってたみたい。声かけてきた子がちよつと引くくらい。でも、

「どーなってるの、彼?」

別の子がそう訊^きいてくるのと一緒に、まわりを囲んでたみんなが一步近づいてきた。

「うららが言うから、みんな我慢してるのよ? うるさくされるの嫌いだ、って言うからさあ」

「そうそう。クラブの勧誘もしなけりゃ、しつこく話を聞いたりもしてない、でしょ」

だからって、色仕掛けするものどころかなあ、って思
うんだけど

「でももう2週間よ、2週間！ それだけの間
体育の時間だけは自習してて一緒じゃないけど、そ
れ以外はずーっと女の子に囲まれてるっていつのに
誰にも興味ないって感じじゃない」

そう　なのよ。 ナッツハウスでたまにお店番し
てたときもそうだったけど、女の子いっぱいの中で
も平気なんだよね、シロップは。

だから、みんな安心して寄ってきてからかったり
ああ、なんだかおなかの中が重くなってきちゃった。

「お昼や放課後は今まで通り学食のバイトで
「休みの日は、別のバイトだ、って言うじゃない。誰
とも遊んでないのよ。この歳の男の子がそんなこと
て、ある？」

「　ひょっとして、女の子には興味ないとか？」
まさか、ね。でも、

「ココ　小々田先生には、昔からかわいがられて
たみたいけど　あっ！」

自分の言葉の別の意味に途中で気づいたけれど、口
を押さえた時にはもう遅かった。

「やっぱ、そういうこと？」

「え？ ええっ!? それいいの？ いいの？」

「バカねえ、ダメに決まってるでしょ。」

だからいいのよあ　」

「そっかあ、それでムクれてたのね。好きに逢え
ないこの辛さ　萌えるわ〜！」

「萌えるだけじゃないわ、先生と生徒だもの。不自
由さが愛を燃えがらせるのよ〜。」

みんながわたしの周囲から少し離れて、あっちこち
ちで一斉にしゃべり出しちゃってる

あ、あ、　あーあ。ごめん、シロップ。

「みんな、なにバカなこと言ってますの〜！」

あ、学級委員長の小島さんだ。助かったわ。これ

5 はるのおべんと

以上はとても聞いてられ

「小々田先生のお相手は、アクセサリーショップの店長さんに決まっているではありませんか！」

え、ええええつつ!!

「こ、小島さん？」

目の前の委員長が、両手を組んで宙を見上げてるだめだわ。もう、限界。

そう思った瞬間、わたしの手首に引つ張られる感じがした。

「うららさんもそう思うでしょう？ もつ2年もお付き合ひされてるんですもの！」

「それじゃ、シローくんと合わせて三角関係うらら、ちよつとそれ本当!? って、あゝっ！逃げたっつ!!」

友達のよしみちゃんに手を引つ張られながら、更衣室に駆けてくわしたたちに、黄色い声が追っかけて来てるし。

あゝ、もう、だれか助けてよおおおっ!!!

「行きましたね。もついいですわよ、みなさん」

うららが教室を出て行く音が聞こえた後、最初に聞こえてきたのは小島くんの声だった。

そのすぐ後に続いて、生徒たちが一斉についたため息の音。ひよい、つと窓枠に掴まって窓の中を覗くと、着替え中だった生徒も服を着て、更衣室へ行く準備をしている。

「あいかわらず、僕の生徒たちにはイタズラ好きが多いコ」

小さい体を窓の外に隠して、僕はもう少し会話を聞くことにした。

「それにしても、うららさんは固いですわねえ」

また聞こえてきた委員長の声が弾はずんでいる。

「そりゃそうでしょ。お芝居はずっていつても、気にな

るクラスメイトをおかずにしちゃったらさあ」

「それにしても、ノリノリだったじゃない？ お芝居には見えなかつたけどなあ」

「あーあー、聞こえないー」

応じる生徒たちの声も負けず劣らずで、おかずになつた一人としては、ため息もつきたくなるけれど、「まったく、でも、そこまで信じてくださらないのも悲しいですわ」

次に聞こえた声が優しげで、少しは我慢しようとも思う。僕も単純だなあ。

「なんでこんなことしてるか、って。いつものうららかなら気付きそうなモンだけさ。やっぱそれとこれとは別、ってことじゃないかなあ」

「どっちかって言うと、他の人とシローくんは別、って感じだけど」

「シロップう♡だもんね」

そうなんだ。うららがシロップって呼んでるのはみんな知ってるんだよなあ。それをクラスでは隠

そうとするから、

「もうちょっと、素直になるまで続けましょっか」
いじられてるのに気が付かないんだろっなあ。シロップが、じゃなくて、自分が。

「だいたいあたしたち、結構しゃべってるんだけどね。シローくんと」

「学食で、ねー」

「うららさん、うかつですわ。ふふ」

背筋が少し寒くなったので、僕は別の窓から校舎に入った。更衣室へ向かう黄色い声を聞いていると、思わず言葉がこぼれてしまふ。

「やっぱり、女の子は怖いコ」

まったく。まったくまったく、もう！

ガッツ、て足に当たった感じがして、気が付いたら少し離れた校舎に何かがあたる音が聞こえてきた。

7 はるのおべんと

「そ、そう怒らないで、うららちやぁん」

更衣室に行く途中の渡り廊下で、木の渡しを蹴り飛ばしちやってたんだけ。顔を上げたら、よしみちゃん顔がこわばってる。失敗しちやったな。

「わたしだつて怒りたくないけど」
聖ルミエールにシロップが留学するの、協力したのはわたしだもんね

——のぞみさんと、こまちさんがパルミエ王国で勉強したいから、つてことで、くるみさんとシロップのふたりと交換留学の形にしちやったのよね。どつちだのかは知らないけど。

シロップは当然嫌だつて言つて、でも最後にOKしてくれたのは、うぬぼれじゃなくて、わたしが頼んだからだと思つんだ——

「お仕事でお休みすることになったら、どうなつちやうんだろつなぁ」

わたしがいじるの抑えないと、シロップがいつか

キレちやいそう。そんなことになったら

「結構、そのほうがうまくいくんじゃないかな？」

「よしみちゃん!？」

思わず体操服持つてない方の手を肩にかけたら、教科書とノートを持ったよしみちゃんが振り向いて言つた。

「みんなだつて、口で言つてるだけだよ。本人を目の前にしたら、きつと——」

しゃべり続けるよしみちゃんは、わたしを安心させたいんだろつな。でも

「わたしだつて、影で誰かのおかずになつても、つてことくらい知つてるけど、ね」

考えると寒気がするから、いつもはあまり考えないようにしてるんだだけ。

あれ？ 声が途切れたわ？

「だ、大丈夫。私はおかずじゃなくて、ちゃんと主食にするから!」

開けた目の前、アップになったよしみちゃんの真つ

赤な顔に、わたしはしばらく口を開けっぱなしだったけど、ひきつった顔のまま、なんとか答えたの。

「き、気持ちだけ受け取る　ね？」

「もう少し、放つといて欲しいロブ」

席が10個くらいしかない狭い自習室で、天井を見上げながら、俺は思わずつぶやいてた。

どうせ今の時間、体育はうちのクラスだけ。ここに来るようなのは俺しかいないから、変身も解いて楽になってただけ。

「授業はいいんだロブ」

ココが言ってた通り、俺は通うチャンスがなかっただけで、勉強が嫌いなわけじゃない。

ナッツやこまちみたいな本好きにやなれないけど、地図みたいな地理や、楽な飛び方のわかる理科は結

構面白いし。数学だけは何に使うのかよくわからなけれど　誰にでも苦手なものはあるって言うから、まあいいよな。

問題は、だ。

「1年いつしよだね、って言って笑ってたの、自分じゃねえかロブ」

閉じた目の裏にふたつしぼりの明るい髪が見えて、俺は思わず頭を振った。

「考えてもしようがないロブ。『清水の舞台から飛び降りる』」

国語の教科書を開いて出てきた慣用句を読んだ瞬間、笑っちゃまった。まるで今の俺だよ。女ばっかの教室に飛び込んで、これからどうなるんだろううなあ。

「墜落しないで、飛んでいけばいいんだけどロブ　つと、まずいロブ！」

自習室の扉に影が見えた瞬間、俺はいつもの姿に変身した。

少し出た煙が開けた扉の下から流れて行って、代わりに入ってきたのは女の子だった。うちのクラス、たしか、うららの

「どうした、カレー屋？」

俺がそう呼ぶと、

「カレー屋って呼ばないでくださいい〜」

情けない声が返ってきた。ああ、いけね。

「悪い。名前で呼ばなきゃうららに怒鳴られるな。よしみ、だったか」

ん？返事がないぞ。顔も赤っぱいし まあ、

いいや。あまり気を回しすぎるなって、うららが言うてたっけな。

「よしみも自習なのか？ 頭よさそうなのに」

「えっと ちょっと、おなか痛くて」

あ、そっか。俺はまた、うららの言葉を思い出していた。女の子が腹を痛そうにしても、倒れそうでなければ手を出さな、だったか。

それじゃヘタなこと言わずに、勉強続けるか。

「シローくん、がんばる、ね」

慣用句の自習テキストを一段落させたころ、となりから声がかかった。時計を見たら、結構時間が経っているな。

「まあな。変なことになっちまったけど、留学を推薦したのが理 学食の店長らしくてさ」

いけね。店長が理事長なのは生徒には秘密、だったよな。そこは守らないと。

「へえ」

「店長の期待じゃあ、裏切れないから。迷惑かけてるとは思うけど、1年頼むな」

言いながら、普通に返事してるのに自分で驚いた。呼ばれるときはあんまいいことないけど さわつたら折れそうないつを見てると、邪魔にもできないな。

考えてみりゃこいつだって、俺みたいなのがクラス

メイトになるなんて思ってもみなかつたろうし。そういう意味じゃ被害者なんだから、せめて気分よく過ごさせてやらないと

「ねえ、シローくん」

そんなこと思ってる途中で、こいつが俺に声をかけてきた。それも椅子ごと向き変えて、真っ直ぐ前から俺を見て、

「うららちゃんって、ごはん？おかず？」

はあ!?

「なんだそりゃ？いくら俺でも、人間食べたりしないぞ」

い、いきなりなに言い出すんだ、こいつ？

「そうじゃなくて 食事にたとえたら、ってこと なんだけど」

たとえ、ねえ。うららの友達なら変わっててもおかしくないけど 目がわりと真剣だ。しょうがねえ、まじめに考えるか。

食事、食事か。そうだな、うららなら――

考えて、言っただけなら、俺は答えたのを後悔した。

「シロップ！よしみちゃん倒れたって、ほんと!?!」
保健室の扉を開けながらわたしが言ったら、中でシロップが耳をおさえて、

「シッ！病人だぞ。静にしるよな」

いけない。また思いつき声出しちゃったみたい。
「シロップが保健室に運んだから、様子見てきて、って先生に言われたのよ。それで、どうしたの？」
近づいて少し小さな声で訊いたら、シロップがほった膨らませて頭を振って、

「俺にもわかんねえよ。いきなり顔真っ赤にして机に突っ伏しちまったんだから。腹が痛いとは言ってたけど、にしたってなあ」

え？真っ赤に？

言われてなんとなく見てみたら、よしみちゃんの顔に鼻血の跡があるわ。これって

「シロップ、よしみちゃんに何か言った？」

「何かって お前を食事に例えたら、ごはんかおかずかって訊かれたから、答えただけなんだから」
「ちょっと待って!? なに訊いてるのよ、よしみちゃん〜っ！」

「で、なんて答えたの？」

「べんとっだ、って言ったただけぞ。俺」

お、おべんとっ!?

「だってお前、外にいるときの方がいい顔してんじゃないか。外で食べるものじゃないと合わないと思ってる。そしたらなんか『外で食べる』がどうこうってブツブツ言い始めて、そのままパツタリ」

あ、ああ、ああああ。

思わず両手で抱えた顔が、赤くなってきちゃう。よしみちゃんが何考えてたかもわかるし、シロップが

いつもわたし見てくれてたのもわかるし

「なあ、うらら。俺、こいつになんか悪いこと言ったのかなあ？」

ああ、もう訊かないですよ。そんな心配そうな顔されたら、怒った方がいいのか喜んだらいいのかわからないじゃないっつ!!

「もう、シロップはごはんでもおかずでもなくてシロップだから、何も気にしないでっつ!!」

春の風でほっぺたが冷えるまで、そのあとの授業ひとつ分かった。クラスの子たちのにやにや笑いつきで。

あーあ。

—おしまい—